弥生人といきもの 2024

鳥に願いを

とりにねがいを

あいち朝日遺跡ミュージアム企画展

AICHI ASAHI SITE MUSEUM

あいち朝日遺跡ミュージアム

はじめに

あいち朝日遺跡ミュージアムでは、大人だけでなく、子どもたちにも朝日遺跡や弥生時代について興味を持ち、理解を深めてもらうため、弥生時代の人々と様々な「いきもの」との関わりについて紹介する企画展を毎年開催しています。

4回目となる今回の企画展では「鳥」を取り上げます。鳥は古くから世界中で信仰の対象とされ、弥生時代の日本でも稲に実りをもたらしたり、死者の魂を運ぶ存在として、また、境界を護る「物見鳥（ものみどり）」として神聖視されていました。ニワトリも弥生時代に大陸からもたらされ、朝日遺跡からもオスの脚の骨が出土しています。

本企画展では、各地の弥生遺跡で出土した鳥を象（かたど）った祭祀具や、弥生時代以降のニワトリに関する資料を展示し、現代まで続く人と鳥との関わりについて紹介します。

目次

はじめに …… 2
鳥だ！マツリだ！ …… 3
鳥とくらす …… 6
長～いおつきあい …… 7
大阪府指定有形文化財　鳥形木製品 …… 8

名古屋コーチン（愛知県農業総合試験場提供）

凡例

・本書は2024年7月20日から9月16日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「弥生人といきもの2024　鳥に願いを」の展示パンフレットである。
・本書の構成と実際の展示構成は異なる部分がある。
・掲載資料の時期区分は、朝日遺跡出土品については弥生時代前期（B.C.6～B.C.4c）、中期（B.C.4～B.C.1c）、後期（A.D.1～2c）とするが、他地域の出土品については所蔵者の見解に従う。
・掲載資料のうち重要文化財には「◎」、都道府県および市町村の指定文化財には「□」を付している。
・掲載写真・図等のうち、提供者と所蔵者が同じ場合は、所蔵者のみの記載とする。どちらも記載のないものは、本ミュージアム所蔵である。
・本書の執筆・編集は、田中恵美が行った。

謝辞

本展覧会の開催にあたり、下記の機関並びに各機関の担当者の皆様にご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。（五十音順、敬称略）
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター、愛知県農業総合試験場、大阪府教育委員会、公益財団法人大阪府文化財センター、大阪府立弥生文化博物館、橿原市、清須市教育委員会、神戸市立博物館、国立国会図書館、小牧市教育委員会、小牧市中央図書館、静岡県埋蔵文化財センター、静岡市立登呂博物館、田原本町教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、西尾市教育委員会、西尾市岩瀬文庫、兵庫県立コウノトリの郷公園、独立行政法人国立文化財機構 文化財活用センター、文化庁、北海道大学総合博物館、三重県総合博物館

主な参考文献

飴谷一・佐藤公保 2000「東海地方の鳥形木製品～本川遺跡出土例の検討～」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』愛知県埋蔵文化財センター
大阪府立弥生文化博物館 2006『弥生画帖　弥生人が描いた世界』
平山加奈 2009「弥生時代の農耕儀礼 -鳥形木製品の役割を中心に-」『古事』天理大学考古学・民俗学研究室紀要10　天理大学考古学研究室
田原本町教育委員会 2015『唐古・鍵遺跡　考古資料目録Ⅰ－土器編1（絵画・記号・文様）－』
江田真毅 2019「遺跡から出土する鳥骨の生物学，「考古鳥類学」の現状と展望」『日本鳥学会誌』68巻2号 日本鳥学会

表紙：(左上)鳥形木製品 住崎遺跡(西尾市教育委員会蔵)、
(右上)鳥形木製品 池上曽根遺跡(大阪府指定有形文化財/大阪府立弥生文化博物館蔵)

鳥だ！マツリだ！

鳥は、古来より世界中で神聖視されてきました。人にはできない“空を飛ぶ”姿が、様々な想像やあこがれを生み出し、信仰の対象とされてきたのでしょう。

弥生時代の日本においても鳥は、稲に実りをもたらす「穀霊（こくれい）」や死者の魂を運ぶ存在として、また、境界を護る「物見鳥（ものみどり）」として神聖視されていました。いわゆる“神の使い”として、様々なマツリの場で欠かせない存在であったらしく、日本中の弥生遺跡から出土した鳥に関する遺物の多くは祭祀具であり、鳥の姿を真似たシャーマンの絵も残されています。

このような鳥に対しての信仰は、朝鮮半島南西部でもみられることから、農耕祭祀と共に朝鮮半島を経て日本にもたらされたと考えられています。

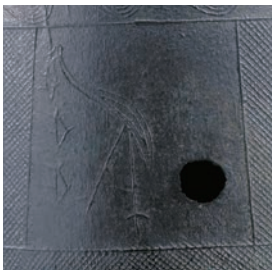
コサギ
（三重県総合博物館蔵）

朝日遺跡の体験水田にやってきたコサギ

弥生人が土器や銅鐸に描いた鳥の絵は、背が高く、脚とクチバシが長く、魚をとらえた瞬間を表現したものもあることから、モデルはサギなどの水鳥だと考えられている。サギはあまり人をおそれず、エサを求めて通年で水田にやってくるため、稲作をする弥生人にとっては最も身近な鳥だった。特にコサギやダイサギなど、白鷺と呼ばれる全身が真っ白なサギは目立ち、稲との関連を強く想起させたのだろう。「長者が餅を矢で射ったら白鳥に変化して飛び去り、その白鳥が留まった山の峰に稲が生えた」という伏見稲荷大社の創建神話などに、その名残をみることができる。

水田跡で確認されたコウノトリの足跡　池島（いけしま）・福万寺（ふくまんじ）遺跡
（大阪府東大阪市・八尾市）（弥生時代前期／大阪府文化財センター提供）

採餌するコウノトリの群れ
（兵庫県立コウノトリの郷公園提供）



〔参考〕銅鐸に描かれた魚と鳥
（国宝　桜ヶ丘4号銅鐸）
（神戸市立博物館提供）

土器や銅鐸に描かれた鳥については、サギの他にツルとする説や、コウノトリとする説もある。コウノトリ説は、池島・福万寺遺跡の弥生時代前期の水田跡で多数確認された大型の鳥の足跡が、その石膏型の鑑定によりコウノトリの足跡だと判明したことを根拠としている。コウノトリも水田で採餌する大型の白い水鳥なので、弥生人にはおなじみの鳥だったのかもしれない。

鳥形木製品

弥生時代の祭祀具の1つに鳥形木製品があります。時期的な使用地域の変化はあるものの、東は静岡県から西は佐賀県までの広い範囲で100点近く出土しています。使い方は諸説あり、竿の先に取りつけ祭祀場を囲むように立てたとする説、墓の周囲からの出土例があることから葬送儀礼に使ったとする説、集落の出入口の柱の上などに取りつけ災いの侵入から護る「物見鳥（ものみどり）」だったとする説、水田での農耕祭祀に使ったとする説などがあります。

鳥形木製品
山賀（やまが）遺跡（大阪府八尾市）
（弥生時代前期／
大阪府立弥生文化博物館蔵）

亀井北（かめいきた）遺跡（大阪府八尾市）
（弥生時代中期／
大阪府立弥生文化博物館蔵）

弥生時代前期の鳥形木製品は4点しか知られていない。これはそのうちの1点で、ヤマフジで作られている。銅鐸や土器に描かれた鳥の絵のように、首が長い鳥を真横から見た姿を単純化したような形をしている。頭部から胴体の切れ込みまで、本体の中心部を細い孔が貫通しており、そこに糸や紐などを通して吊り下げられるようになっている。

立体的に作られた鳥形木製品で、コウヤマキ製のためズッシリと重い。底面中央に竿を挿せる穴があるため、高く掲げるようにして使われたと考えられる。翼がないので飛ぶ姿ではなく、高い所にとまる鳥の姿を表したようだ。頭部に小さな突起があり、ニワトリがモデルかもしれない。

◎鳥形木製品　登呂遺跡（静岡県静岡市）
（弥生時代後期／静岡市立登呂博物館蔵）

裏

表

鳥形木製品　瀬名（せな）遺跡（静岡県静岡市）
（弥生時代後期／静岡県埋蔵文化財センター蔵）

弥生時代後期になると東海地方の遺跡からも鳥形木製品が出土するようになる。東海地方の鳥形木製品は、板状の胴体と翼を十字に組合わせたものが多い。

登呂遺跡と瀬名遺跡の例もそのタイプで、どちらも水田から胴体部分のみが出土している。一見、鳥の形には見えないが、くびれで頭部や胴体部を表しており、瀬名遺跡の資料にはクチバシの表現や棒を差し込める孔もある。このような形でも、翼と組み合わせて下から見上げれば、鳥が飛ぶ姿に見えるから面白い。

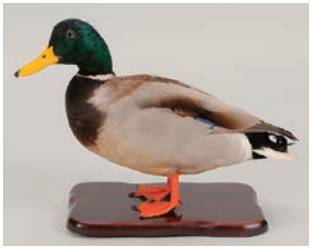
鳥形木製品　住崎（すみさき）遺跡（愛知県西尾市）
（弥生時代終末期～古墳時代前期／西尾市教育員会蔵）

胴体と翼を別材で作るタイプの鳥形木製品は、その片方の部材しかみつかっていない例がほとんどだが、胴体部と翼部がセットで出土した希少な例の1つである。各部材中央の孔で軸留めし、さらに棒などの先端に取り付け掲げて使用したと考えられる。

鳥形土製品

◎鳥形土製品　朝日遺跡

鳥形土製品　井通（いどおり）遺跡
（静岡県浜松市）
（弥生時代中期／
静岡県埋蔵文化財センター蔵）



マガモ　オス
（三重県総合博物館蔵）

朝日遺跡の鳥形土製品は頭部の表現がほぼ省略されているが、ずんぐりした体形の水鳥をモデルにしたものだろう。井通遺跡の鳥形土製品は頭部しか残っていないが、顔つきや首回りの模様はマガモのオスを想起させる。どちらも液体を入れる器と考えられ、マツリの場で酒を飲むために使われたのかもしれない。

絵画土器

弥生時代では、道具に絵を描くことはその道具に願いや祈りを込める行為だったと考えられており、絵画土器は祭祀用の特別な土器とされています。そのため「穀霊（こくれい）」の運び手との信仰があった鳥は、弥生時代の絵画に多く登場するモチーフの1つです。

また、幅広の袖の服を着て両手を挙げる人物の絵は、鳥装のシャーマンとされています。マツリを取り仕切るため、シャーマンは鳥の姿を真似てその神秘的な力を発揮したのかもしれません。

盾と戈を持つシャーマン
（田原本町教育委員会提供）

◎絵画土器（人物／シカと鳥）
唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡（奈良県田原本町）
（弥生時代中期／田原本町教育委員会蔵）

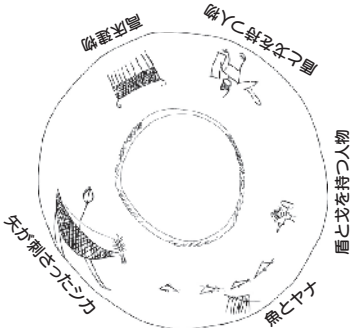
壺の胴部の破片で、盾と戈（か）を持つ人物画を描いた後にその絵は消し、改めてオスジカ1頭と鳥2羽を描いている。鳥は足も首も細長く、サギ類を表したものだろう。シカもまた弥生時代に稲を実らせる「穀霊」として崇められた霊獣であり、豊作を祈る農耕祭祀に使われたと考えられる。

復元図

絵画土器（楼閣にとまる鳥）
清水風（しみずかぜ）遺跡（奈良県田原本町）
（弥生時代中期／
田原本町教育委員会蔵）

ごく小さな破片だが、唐古・鍵遺跡から本資料と似た絵画土器が出土しており、渦巻き状の棟飾りを持つ楼閣の屋根にとまる鳥の絵、と判断できる。このようなシンボル的な建物に鳥がとまることは、瑞兆と考えられたのかもしれない。

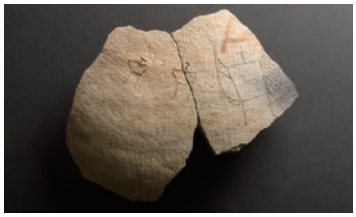
絵画土器（魚・ヤナ・人物）　清水風遺跡（奈良県田原本町）
（弥生時代中期／田原本町教育委員会蔵）※展示はレプリカ



壺の真上から見た絵画の配置

列をなして泳ぐ魚を、頭に羽飾りをつけ盾と戈を持つシャーマンと思われる人物が追いかけている。この絵は右の図のように、大型の壺の肩を囲むように連続して描かれた絵の一部で、農耕祭祀に関わる物語を表すと考えられている。

絵画土器（両手を広げた巫女）
清水風遺跡（奈良県田原本町）
（弥生時代中期／田原本町教育委員会蔵）



絵画土器（鳥装の巫女と人物）
清水風遺跡（奈良県天理市）
（弥生時代中期／奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵）※展示はレプリカ

□絵画土器（翼を持つ人）
坪井（つぼい）遺跡（奈良県橿原市）
（弥生時代中期／橿原市指定文化財／橿原市蔵）

鳥装の巫女
（田原本町教育委員会提供）

両手を挙げる鳥装の人物を描いた土器は近畿地方を中心に出土しており、鳥装の巫女の姿とされている。清水風遺跡の田原本町域から出土した土器に描かれた人物は、胸の表現から女性であるとわかる。同じく清水風遺跡の天理市域から出土した土器には、胸にシカらしき絵がある服を着る人物と、付き従うような2人の人物が描かれており、マツリの場の巫女と参加者の様子を表したものだろう。坪井遺跡の人物は服を腰紐で結び、翼はもはや服の袖というより鳥の翼そのもののような描き方である。この人物は翼とは別に下におろした腕も描かれているようにも見える。弥生時代中期には中国の道教的な神仙思想が伝わっていた可能性があることから、この人物も神仙の一種である有翼の羽人なのかもしれない。

鳥とくらす

朝日遺跡から出土した鳥の骨の中には、弥生時代の祭祀具に登場する鳥のモデルと考えられるサギやカモが含まれており、これらの鳥が実際に弥生人の身近にいたことがわかります。なお、数が最も多いのはカモ類の骨で、食用などのため狩猟対象になっていたことが伺えます。

また、弥生時代にはニワトリが日本にもたらされました。ニワトリは東南アジア原産のキジ科のセキショクヤケイを原種とし、今から8千年前の中国では飼育されていたようです。弥生時代のニワトリは食用ではなく、夜明けを告げる「時告げ鳥」として飼育される、大変貴重な鳥でした。

ニワトリのオスの中足骨
（弥生時代中期／朝日遺跡）

弥生時代の遺跡から出土したニワトリの骨は、7遺跡から計約20点しかない。いずれも各地域の拠点的集落から出土しており、朝日遺跡での出土例が最東端となる。朝日遺跡で出土したこの中足骨にはオスにしかないケヅメがあり、やはり時告げ鳥として飼われていたのだろう。希少なニワトリの飼育は集落のステータスシンボルでもあった。

セキショクヤケイのオス(中央)とメス(右)、
奥はニワトリのヒナ(左上)とメス(中央上)
（北海道大学総合博物館提供）

ニワトリのヒナの骨
唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）
（弥生時代中期／田原本町教育委員会蔵）

1995年の調査で祭祀用の大型建物の近くから出土したもの。キジ科の骨であることはわかっていたが、2023年に化学分析によりニワトリのヒナの骨であると判明した。これ以前は弥生時代のニワトリの骨はオスしか確認されておらず、寿命も10年程はあるため、オスのみが輸入されていた可能性が捨てきれなかった。この発見は、つがいで飼育し繁殖もさせる養鶏の開始が、弥生時代まで遡ることを示唆する。

弥生時代にニワトリは極めて希少だったこともあってか、明確にニワトリがモデルとわかる道具はほとんど作られていません。しかし、卑弥呼の都との説もある3世紀の纒向遺跡からはニワトリ形木製品が出土し、続く古墳時代では水鳥の埴輪よりもニワトリの埴輪の方が、登場が早く点数が多いことがわかっています。

おそらく、社会の階層分化が進み、集団のリーダーが王や女王として権威を高めていくことと、貴重な時告げ鳥として飼育自体がステータスとなるニワトリとは、相性が良かったのでしょう。祭祀に登場する神聖な鳥の座は、生活に身近な水鳥から、闇を払い太陽を呼ぶニワトリへと交替していきます。

ニワトリ形木製品　纒向石塚古墳（奈良県桜井市）
（古墳時代前期／奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵）※展示は左資料のみ

この2点のニワトリ形木製品が出土した纒向石塚古墳は、纒向遺跡の中にあり最古の前方後円墳として知られる。ヒノキ製で、トサカの孔に紐などを通して吊るせるようになっている。表面の赤彩は胴体とトサカにのみ施されており、実際にいたニワトリの配色を真似たのだろう。纒向石塚古墳からは埴輪が出土しておらず、後のニワトリ形埴輪の先駆ともいえる資料である。

水鳥形木製品　纒向遺跡（奈良県桜井市）
（古墳時代前期／奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵）

水鳥形のヒノキ製の鳥形木製品である。土製品ならば容器状の形は一般的だが、木製品では珍しく、この他には佐賀県詫田西分遺跡の弥生時代中期の例くらいしかない。詳しい用途は不明だが、底面が広く平らで安定して平置きができ、まるで後世の硯のような作りになっている。

長～いおつきあい

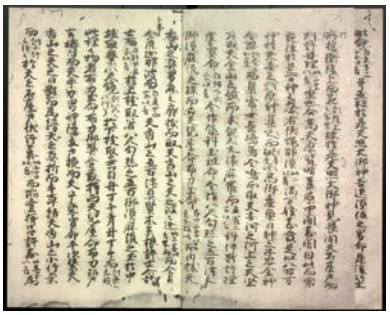
古墳時代頃から信仰の鳥の主役はニワトリへと移り、『古事記』などで語られる天岩戸神話でも「常世長鳴鳥」という名で登場し、太陽神のアマテラスを呼び戻す手助けをします。そのためか、その後の日本でもニワトリは神聖な鳥として扱われ、主に時告げ鳥や闘鶏を目的として飼育され、表立って食用を目的とした養鶏は行われませんでした。中世には地獄で罪人を苦しめるニワトリの絵も描かれています。

状況が変わるのは江戸時代で、無精卵は孵化しないことが知られるようになり、玉子は食べても仏教が禁じる殺生には当たらないと考えられるようになりました。18世紀には玉子料理専門のレシピ本も発売され人気を博します。

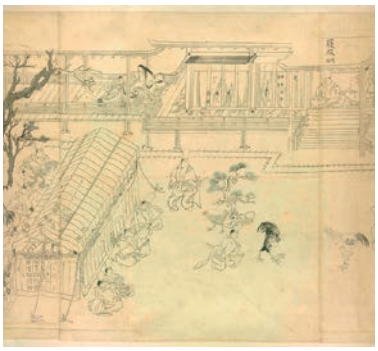
さらに明治時代には、食用の鶏肉と玉子の生産を目的とした産業的養鶏がいち早く愛知県で始まり、元・尾張藩藩士の海部壮平・正秀兄弟によって名古屋コーチンが生み出されます。

ニワトリ形埴輪
掖上鑵子塚古墳（奈良県御所市）
（古墳時代中期／奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵）

掖上鑵子塚古墳は5世紀後葉の築造と推定される大型の前方後円墳で、様々な副葬品や形象埴輪の出土で知られる。この埴輪はそのうちの1点で、右脚にケヅメの表現があることから、オスのニワトリとわかる。ニワトリ形埴輪の多くはオスの姿であり、闇夜を払う神聖な力が古墳での祭祀でも重視されたことが伺える。



［参考］『古事記：国宝真福寺本』上 京都印書館1945
「常世長啼鳥」の記述（右から6行目）
（出典：国立国会図書館ウェブサイト
（https://dl.ndl.go.jp/pid/1184132））



［参考］『年中行事絵巻』の闘鶏の場面（出典：国立国会図書館ウェブサイト（https://dl.ndl.go.jp/pid/2591112/1/13））

右は庶民が神社の境内と思しき場所で開催する闘鶏の様子、左は貴族が邸宅の庭で催す闘鶏の様子である。『年中行事絵巻』は平安時代末期の宮廷や公家における年間の儀式や祭事、民間の宗教行事などを描いた絵巻。この頃にはニワトリの飼育が庶民にも普及していたことがわかる。

［参考］『地獄草子』より「鶏地獄」
（奈良国立博物館蔵／
出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp））

むやみに鳥獣を殺生すると落ちる地獄で、炎をまとい火を吹くニワトリが脚で罪人を引き裂いている。

海部養鶏場百分之一図
明治時代　里樵 筆（小牧市教育委員会蔵）

貴人ノ訪問

卵集メル図

掃除ノ図

名古屋コーチンを生み出した、海部壮平・正秀兄弟が経営する養鶏場の最盛期を大画面に描く。明治23年(1890)、海部壮平は東京・上野で開催された第三回内国勧業博覧会に自身の養鶏法について著した『養鶏方案』を出品し、三等有功章を受賞した。本図は、それに付随する絵図面として制作・出品された原本と考えられるもの。鶏舎を『養鶏方案』の記述通り正確に描くだけでなく、働く人々や訪問客、鶏の動きまでが生き生きと捉えられている。画面中央、床の間がある部屋で「貴人ノ訪問」を出迎えるのは、海部兄弟だろうか。

大阪府指定有形文化財　鳥形木製品

池上曽根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）
（弥生時代中期／大阪府立弥生文化博物館蔵）

竿先に掲げた状態

底面

飛び立つカルガモ

大阪市北区から和歌山市を結ぶ国道26号の建設工事に伴う発掘調査によって、1970年に集落の環濠から出土した5点の鳥形木製品の1つ。弥生時代の鳥形木製品の研究が始まるきっかけを作った資料として知られる。弥生時代の鳥形木製品のほとんどは特徴をデフォルメし単純化した形をしており、このように立体的かつ写実的な形をしたものは少ない。本資料はその中でも抜きんでて写実的な造形をしている。

ヒノキ材を丁寧に丸彫りして作られており、その姿勢や尾羽を広げた様子からおそらく、カモ類が飛び立つ姿をモデルとしている。翼は失われているが、胴体には別部材で作った翼をはめられる切れ込みがある。底面には孔が2つあり、竿などを挿し高く掲げて飛翔する姿を表現したと考えられる。この2つの孔は角度が異なっており、竿を尾に近い孔に挿すと頭をあげて上昇する姿勢、胴体中央の孔に挿すと水平飛行の姿勢になる。

弥生時代の鳥形木製品の使い方については諸説あるが、いずれも鳥が飛翔し容易に遠隔地や高所に至ることができる力を、祭祀や境界の守護に取り入れたい、という祈りが源となっている。それだけ鳥形木製品が多様な祭祀の場で欠かせなかったということであり、本資料も2種類の飛翔状態を表現できることから、使用場面や祭祀の経過状況によって使い分けがなされていたのかもしれない。

あいち朝日遺跡ミュージアム

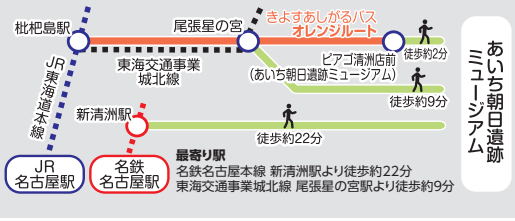
■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地　■ TEL：052-409-1467　■ 駐車場 15 台

企画展
「弥生人といきもの2024
鳥に願いを」

編集・発行
あいち朝日遺跡ミュージアム
2024（令和6）年7月20日発行

AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム

公共交通機関



クルマ

名古屋第二環状自動車道「清洲東IC」から約1分
施設駐車場の数には限りがあります。
駐車場が満車の場合、清洲公園駐車場に駐車できます（午後5時45分まで）。